# モノグラフ

# 主張する美術作品

久保 正敏（くぼ まさとし）
本館文化資源研究センター

常設展示場オセアニア展示のオーストラリア・アボリジニのコーナーに、「先住権試合」という画題の油絵が展示されている。ノーザンテリトリ美術博物館が一九八四年以来毎年開催し、今ではオーストラリアで権威のある芸術賞のひとつ、「アボリジニとトレス海峡諸島民芸術賞」に二〇〇〇年入選した、アボリジニ作家ゴードン・ホッケイ氏の作品である。オーストラリア白人政府の圧政、植民地主義、複数国家による土地収奪などに対するアボリジニの抵抗をあらわすさまざまなシンボルが散りばめられた絵画で、カンガルーがアボリジニを、ブタが白人政府と多国籍企業をあらわす、というかなり強烈な図柄だ。この絵画を購入したのは、先住民の現状や運動を説明するのに適切と考えたからだ。逆に言えば、先住民の主張がストレートに描かれた絵画はわかりやすい、ということがある。

アボリジニ資料については、すでに一九八〇年代初めから、美術工芸運動と文化表象運動の高まりを示す資料として、美的価値で選ぶのではなく全体を集めるという方針で絵画や彫刻が収集されてきた。民博の従来の収集方針、すなわち標本資料は、ほぼ現在の時点で普通の人びとが生産・生活・製作・宗教儀礼に用いる用具類を対象とし、偽物か本物かが重大な問題となるもの、美術、骨董的価値のあるものは、原則対象としない、宝物に主眼を置かない、という方針からは逸脱しない、と考えられたからである。

しかし近年の民博では、特別展に合わせた大型コレクションとともに、美術作品の収集が多くなっている。その理由のひとつは、生活様式のグローバル化が進み、生活用具には見かけ上の地球的差異が少なくなり、そうしたモノから文化を語ることが難しい、と考えられるようになったからだ。また、先住民をはじめマイノリティがアイデンティティを主張する表現メディアとして芸術・芸能活動を活発化してきた歴史的な流れもある。

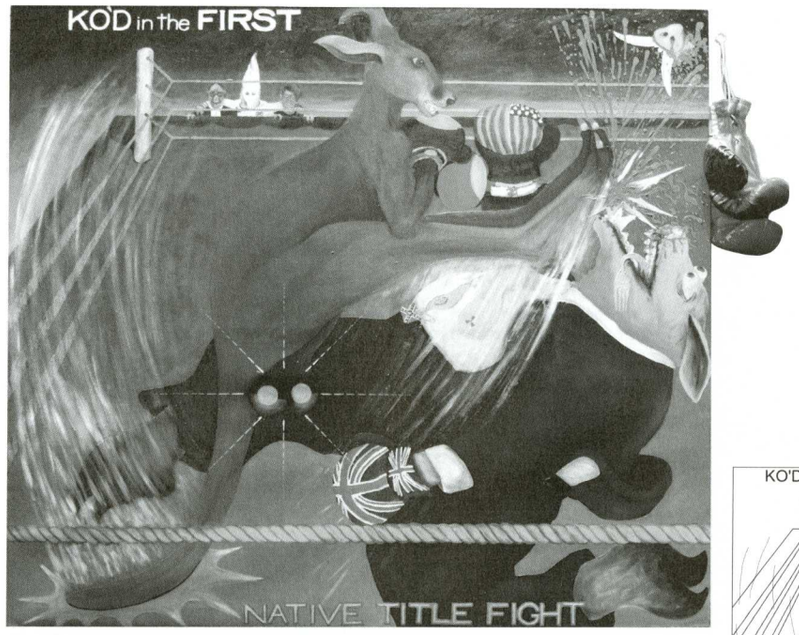
アボリジニに関しても、一九八〇年代前半以降、先住民芸術市場が確立していく。そのきっかけのひとつが先述した芸術賞などの創設であり、これが西欧美術市場にアボリジニ社会を巻き込み、結果、作品の値段が上がっていく、という現象も起きた。この価格高騰に美術館や博物館の収集が一役買ってきたこともまた、紛れもない事実である。

これらアイデンティティ表象のための資料は、現地の人びとが自ら使う従来型の用具と異なり、内部外部に向けたメッセージ発信がおもな機能であり、情報メディアの性格をもつ。元をたどれば芸能や芸術は、神や人間同士のコミュニケーションのメディア、象徴や表象のためのメディアであり、情報メディアだった。したがってこれら資料は本来能弁である。現代の人びとの文化を表現するために、こうした資料収集が増えていくのは当然の流れであろう。

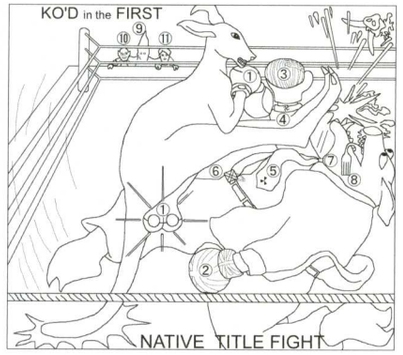
しかし、能弁な情報メディアに比べ、過去に集積された大量の用具類などは寡黙である。その地域固有の生態・歴史環境に見合った人びとの観念、知、身体技法や技術、さらには、政治・経済的な関係性の網など、モノが背負った背景情報について、さまざまな切り口からの突っ込みを重ねていかないと、モノは語り出さない。これらを語らしめる努力は十分になされてきたのだろうか。

さらに言うなら、製作、使用、廃棄、収集、博物館への収蔵、という、個々のモノのライフサイクルに伴うストーリーも数多くあるはずだ。例えば民博には、一九五〇年代から一九七〇年代に東南アジアでおこなわれた数々の民族学調査団の活動に伴って収集された資料が所蔵されている。ところが、こうした調査団が収集したモノ、記録した写真資料、映像資料が、さまざまな経緯から複数の博物館に分散している、という状況がある。したがって、他の博物館所蔵資料との総合的な付き合わせ、写真や映像など他の情報メディアとの付き合わせがないと、モノの背景の全体像が見えてこないことがあるのだ。

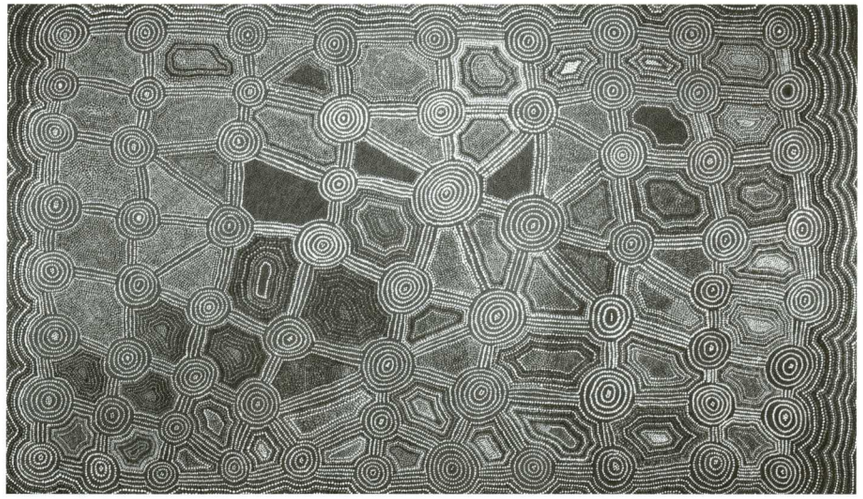
そこで、写真や映像などの情報メディアも含め、他の博物館に分散している資料や情報との突き合わせも含めて、民博所蔵の各種資料に、あらためて光を当てていきたい、というのがこのコーナーの趣旨である。このコーナーには、「モノ・グラフ」と名付けてみた。モノに関する、専門論文としてのモノグラフ、記述としてのグラフィ、落書きが原義であるグラフィティ、となることを狙ったものだ。モノと情報をめぐるさまざまな切り口の物語が展開することを期待していただきたい。




**油絵 「先住権試合」**
(H217475) 2000年収集
工芸の世界では、作者も明示されず著作権概念も明確ではないのに対し、美術作品には著作権が必ず意識されるので、所蔵品カタログや展示図録とはことなる、この『月刊みんぱく』のような雑誌に写真を掲載する場合には、配慮が必要だ




**「先住権試合」の絵解き**
さまざまなシンボルの詳細は展示場の解説シートをご覧いただきたい。①がアボリジニ旗と同じ赤・黒・黄の配色であり、②～⑧はオーストラリア政府と多国籍企業の癒着とずるさ、⑨～⑪は政治家たちをあらわす



**アクリル画**
(H85765) 1981年収集
ポッサムの創世神話（ドリーミング）を描いた、中央砂漠地域のアクリル画。美術関係者の見立てによれば、民博所蔵のアクリル画のなかでもっとも美術的価値が高いもののひとつらしく、オーストラリアの各美術館での収集も多い。収集当時はそれほどではなかったが、現在はかなりの高額になっているようだ

**ディジュリドゥ**
(H217480) 2000年収集
中央砂漠地域の絵画に固有の点描スタイルとアボリジニ旗の配色で装飾された、アボリジニが世界最古と誇る管楽器ディジュリドゥも、美術作品の一面をもつ